博士論文（要約）

# 性解放？ 女性解放？ ――性科学と清末民初期の中国におけるジェンダー

楊　力

序論

本研究はジェンダーの視点を用いながら、20 世紀初頭の中国で欧米の性科学がどのように受容されたのかという問題を考察するものである。近代に議論された性に関する言説の特徴を明らかにし、それが女性にとってどのような意味を持つのかということについても考える。女性の性と近代の関係は、性的な領域における「女性解放」の内実を再考することにもつながるからである。

本研究は以下のような具体的な問題から議論を始めたい。

まず、海外の文献が中国に移入される過程での取捨選択の問題である。ヴィクトリア時代の通俗医学書や結婚案内書が大量に出版される中、清末の中国社会にはどのような書籍が紹介されたのか、あるいはその陰でどのような書籍が選ばれなかったのだろうか。また、20 世紀前半の英米では、ヴィクトリア朝時代の性規範が綿々と残存した一方で、新しいな思想が相次いで出現した。このような風潮の中、海外の知識を採り入れる際に、民初時代の中国知識人の間でどのような取捨選択の意識が働いたのだろうか。さらに、清末と民初の性科学の言説では、どのような連続性と断絶があるのか。そしてそれは、同時期の日本社会や英米社会と中国とをどのように結んだのだろうか。

本研究は以上の問題を念頭に置き、二部五章の構成をとる。第一部では清末(1901-1918)、第二部では中華民国初期(=新文化運動期、1918-1927)に刊行された性科学書を考察する。なお、本研究が扱う年代は、西洋の性規範が伝来した 1900 年前後から、性をめぐる議論が盛んに展開される 1920 年代後半までとする。

※刊行予定のため、本部以下略。

第一章「強国保種をめぐって――清末の性科学と「性」」では、清末以前の性をめぐる言説を中国伝統性学の領域において考察する。そして、性科学が中国に伝来した歴史を概観したうえで、清末の知識人の性科学に対する態度を考察する。以上の内容を踏まえ、清末に翻訳され、出版された性科学書を通して「近代的性規範」を検証する。ここでは、テキストの内容面だけでなく、性科学書が出版された背景や、販売される際の宣伝のされ方とその読まれ方をも検討の対象とする。本章で考えるのは、次のような問いである。第一に、性科学書はどのような風潮の中で翻訳され、出版されたのか。そして、実際に出版された性科学書は、どのような読まれ方をしたのか。翻訳および出版といういわば出版社側の意図と、テキストの読まれ方という読者の受け取り方との間にはどのようなずれがあったのか。第二に、これらの性科学書に書かれた性規範が合理化された背景にはどのような思想があったのか。そして、性は愛と婚姻との関係はどのような意味を与えられ、性と愛と結婚という三位一体の性規範はどのように構築されていたのか。

※刊行予定のため、本章以下略。

第二章「「女性に性欲はない」のか？――清末における「性」とジェンダー」では、清末の性科学書における女性の性欲に関する言説に焦点を絞り、テキストの翻訳研究を通して、英米で性科学を通して構築されたジェンダーがどのような取捨選択を経て清末中国に伝わったのかという問題を検討する。中国の問題を考えるのに先駆けて、まずは外国の状況を整理する。外国の状況として、19 世紀の英米における女性の性的欲求に関する科学的言説を考察したうえで、明治時期の日本で出版された性科学書に表された女性の性的欲求をめぐる言説を紹介する。これらの考察の後、清末中国の知識人が英米および日本といった外国の文献を翻訳する作業を通して、女性の性欲をめぐる海外の言説をどのように取り入れたか具体的に検証する。本章で取り上げるのは、中国語に翻訳された『男女交合新論』(1901) と原書 *Creative and Sexual Science, or Manhood, Womanhood, and their mutual Interrelations* (1875)、日本語訳『男女之義務』(1879) である。原書と翻訳を比較しながら、女性の性欲の肯定、性行動における女性の主導権、性における男女二項対立の構造という三つの要素をめぐって論じる。

※刊行予定のため、本章以下略。

第三章「「礼教」から「科学」へ――新文化運動期の性科学と「性」」では、新文化運動期の性に関する言説を広く取りあげる。この時期には、性科学の学説は性科学書だけでなく、多くの媒体を通して社会に広く浸透した。その普及ぶりを概観したうえで、性科学がどのように利用され、社会においてどのように位置づけられたのかという問題を検討する。さらに、そのような性科学における性規範が愛と婚姻との関係性にどのように反映されているかという問題を中心に検討し、性と愛と結婚の三位一体が意味するものが清末から変容したことを明らかにした。この結果を踏まえた上で、本章ではさらに、新文化運動期において、女性の性欲にはどのような社会意義が付与されるかを考察する。とりわけ、女性の性欲はジェンダー秩序の変革につながり、「女性に性欲がある」と考えることが女性を一人の独立した個人を見なし、社会的権利を認めて彼女たちを束縛していた旧弊な規範から解放することにつながる重要な問題であるという認識がどのように生まれたのか、その背景を検討する。

※刊行予定のため、本章以下略。

第四章「「女性にも性欲はある」のか？――新文化運動期における「性」とジェンダー（一）」では、第三章の内容からさらに踏み込んで、新文化運動期の中国人知識人の性科学言説の受容について考える。中国で性科学の知識が広まるにつれて、当時の知識人は「性」に関するどのような点で「伝統」を批判し、新しいジェンダー秩序のどのような点を強調したのだろうか。伝統批判と新秩序の特徴を並べてみることで、性科学を根拠として女性の性欲を認め、その容認が女性の解放につながるという認識が新文化運動期に創出されたことがわかる。本章で取り上げるのは、20 世紀前半に欧米で人気を博した性科学書 *Married Love*(1918)の中国語訳『結婚的愛』(1924) である。同書に書かれた女性の性欲をめぐる言説に焦点をあて、性規範におけるジェンダーに注目しながら、周作人 (1885-1967)、張競生 (1888-1970) に代表される当時の中国知識人たちの女性の性に対する認識の特徴を検討する。その際、次の三つの問題を設定した。まず、新文化運動期の知識人はどのように女性の「性解放」を唱導したのか。その際、英米の性科学の知識がどのように援用され、中国の現状に当てはめられたのか。その結果、英米のどのような性規範が中国に受容されたのか。以上の問いに答えることで、新文化運動期の知識人たちが性科学言説を認識する際の特徴を明らかにすることを目指す。

※刊行予定のため、本章以下略。

第五章「独身女性は「性抑圧」か？――新文化運動期における「性」とジェンダー（二）」では、新文化運動期における性欲についての言説では、科学的な知見に基づいて女性の性欲を全面的に肯定し、女性にも男性同等に性的な快楽を追求する権利を認めることとなったという前章の分析結果を踏まえ、独身女性の性を取り上げる。新文化運動期の中国では、独身女性は性欲が満たされないと想定され、社会的な糾弾の対象となった。本章では大正時期の日本と比較することを通して、当時の中国社会の特徴が明らかにされる。具体的には、大正期の日本で活躍していた性科学者の田中香涯（1874-1944）の性理論について、中国での受容状況を概観する。その上で、魯迅（1881-1936）による「寡婦主義」における独身女性批判と、そこに見られる田中の思想の影響を考察する。「寡婦主義」の中で魯迅は独身女性を家族からの逸脱者と見なし、未婚女性を身体および精神の問題とする従来の中国伝統医学とは違う、新たな角度から批判した。ここに、性科学の受容とともに、未婚という性のあり方が新たに創出された「性愛」という領域に組み込まれたことが明らかになった。

※刊行予定のため、本章以下略。

結論

※刊行予定のため、本部略。